長谷部浩先生(美術学部・先端芸術表現)が学生にすすめたい本

人類の歴史の暗喩として、図書館があるとするならば、膨大な知の営為のなかから、一冊の本を選ぶのは、滑稽なしわざに違いない。それでも、あえて選択するとすれば、自分の専門領域のなかで、もっとも頻繁に手にする書籍になるのだろう。私の場合、平凡社から昭和三五年に刊行された『演劇百科大事典』(全六巻)は、自宅と研究室に同じものが置いてあり、手に取らぬ日はない。もとより、私の意図は、『演劇百科大事典』をすすめるのが、目的ではない。だれもがそのジャンルのもっともすぐれた事典・辞書を、選び、購入し、家に置いてもらいたいと望んでいる。

図書館にある本を利用するには、なにを探すべきかを知ることが肝要であり、OPACなどの検索システムを縦横に使いこなすには、事典がもたらす基礎知識が不可欠となる。即座に参照できるリファレンスがあって、はじめて図書館が生きる。その根幹となる一冊は、自分自身が所有するしかないのである。